

## 審査の結果の要旨

氏名 山田 寛邦

1960年代の学校経営の近代化論をはじめとして、経営学の理論や知見に基づく学校組織改革の必要性が繰り返し唱えられてきた。本研究が主題とする「組織開発」も、学校組織への適用が試みられている経営学の理論かつ実践手法の一つだが、経営学への参照が十分に行われていないなど、理論的にも実践手法としても課題がある。本研究は、このような問題意識から、学校経営学における組織開発論を経営学に即して検討したうえで、問題解決アプローチとポジティブアプローチに基づく組織開発を一つの学校で実践し、それぞれのアプローチが教職員に与える影響の過程を詳細に分析することで、学校における組織開発の理論と実践の発展に貢献することを目的にしている。

本論文は、本研究の課題と論文構成を簡潔に述べた序章を含め、全9章で構成されている。第1章では、今日の学校経営に求められる組織変革の課題に関連する政策動向を概括しながら指摘し、組織開発に着目する意義を述べる。第2章では、経営学における国内外の組織開発論をレビューした後、学校経営学における代表的な組織開発研究を批判的に検討している。続いて第3章では、本研究の目的とリサーチクエスションを改めて述べ、研究の方法・対象、及び教職員の「行動・思考・理解」と心理的エンパワメントに注目した分析枠組について記述している。第4章から第7章では、問題解決アプローチとポジティブアプローチに基づく組織開発実践内容、及び質的データ分析の手法を用いた分析の結果について報告している。問題解決アプローチについては、学校の教育目標に向けた実践の結果の成否や同僚からのフィードバックによって、「確かな実践イメージ」の獲得や実践課題の修正がもたらされる過程を示している。また、現状認識においては教職員が自己効力感、有意味感を得て自己由来心理的エンパワメントが行われているのに対し、課題生成では自己由来心理的エンパワメントに加えて正当感や一体感の獲得という関係由来心理的エンパワメントが行われていることなど、心理的側面に関する分析結果を報告している。一方、ポジティブアプローチに基づく組織開発が教職員に及ぼす影響については、学校の教育目標を意識して実践に着手する「学校の教育目標を追求するための基盤」と「対話的な同僚関係を高める基盤」が築かれる過程を描出し、その過程における心理的エンパワメントの態様を分析している。問題解決アプローチでは課題生成において得られていた決定感がポジティブアプローチでは観察されないことなど、両アプローチの比較検討も行っている。最後に第8章では、本研究の知見をまとめ、その理論的・実践的な含意、並びに本研究の限界と今後の展望を述べ、本論文を締めくくっている。

本研究は、問題解決アプローチに基づく組織開発が学校の教育目標を意識した教職員の行動や実践に与える影響の過程やポジティブアプローチに基づく組織開発が対話的な同僚関係を強める基盤を形成する過程を分析して、今後検証されるべき仮説を提示している。また、経営学の立場から学校経営学を検討して、その理論構築や実証研究の課題を指摘したことにも意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。